



※ “つるみん” 平成26年度第38回鶴嶺祭『ゆるキャラグランプリ』でグランプリを受賞。1年2組小山田夏芽さん、鬼塚麻未さん（旧クラス）の作品で、その思い（願い）は、3つ。・「世界中を飛んで、鶴嶺の名を広めている鶴」・「好きなものは笑顔と思いやり」・「鶴高生と協力して、世界中を笑顔にするのが夢」です。

楽しい文化祭でしたね。2年生は修学旅行があり、高校生活の大事な思い出作りです。3年生は進路の本気モード全開です。調べたいこと・勉強したい時に図書館を有効利用してください。1年生は良書を読める時期です。沢山の文豪が待っていますよ。みなさんの読みたい本のお手伝いをさせてくださいね。

司書



◆昔の茅ヶ崎を見てください。

◆新聞記事は読んでもらいたい情報です。

◆11月の予定も廊下にあります。

今月のおすすめ本 (司書 ver.)

『村上海賊の娘』 和田 竜【著】 新潮社【出版社】 NDC913.6 (蔵書あり)

読んでみたいと思ったきっかけは、著者の方が調べて調べて系譜に女子がいたと見つけたので、この小説が出来上がりましたの一言でした。昔も今も、婚活は時代を越えても、出会いはご縁が大事ですね。一読してね。

高校時代読んだ本 4 5 6 7 9 10 11 12 1 2 3

私が高校生の時センター試験の国語が、堀江敏幸「雪沼とその周辺」の「送り火」という話からの抜粋でした。とある女性が父親を二年前に亡くし、残された大きな家での母親と二人暮らしをしていた。心細くなつて貸間の広告を出した所、そこに書道教室を開きたいという男性がやってくる——試験が終わつて、二人がどうなったか気になり、受験の真つただ中にも関わらず本屋に駆け込みました。思つていたのと真逆で、いわゆる幸せな終わり方をするような話ではなかったのだけれども、(抜粋された部分がまったくもって陰のないところで、そういう終わり方をするなんてまったく予想していなかった)一人の人間の生きてきた様子や出来事に対して、何らかの意味づけをすることもなくただ傍らで同じ方向を見て描き出しているというやり方に、ある種の優しさを感じたのでした。

もう一冊、ジョルジョ・モランディという画家の画集について書きます。二〇一一年、神奈川県美で行われるはずだった展覧会が原発事故の影響を懸念して開催中止になりました。発行予定だった図録が画集として作り直されたものです。

モランディの作品にかかっているものは身の回りにある瓶や壺、そこらにありそうなものばかりで、さらには物がはつきりと明確に描かれているわけでもない。けれども物の取り囲む空気や台座に落ちる影、物の存在感がすつと伝わってきます。気配を描くことによつてそのものも描きだされるといってもいいでしょう。

実はその画集に雪沼の作者が文章を寄せているのですが、それを知ったときは妙に納得してしまいました。両者とも「見る」ということが第一にある作家だと思ふからです。美化することも悲観することもなく、相手や対象を自分の領分に取り込まず、ただじつと見つめている。何かに属することもできませんから、ある意味孤独なやり方かもしれない。でもそうやってはじめて、向き合えることであるのではないかなと、これらの本は気づかせてくれるような気がします。

『雪沼とその周辺』 堀江 敏幸【著】 新潮社【出版社】

『ジョルジョ・モランディ』 岡田 温司【監修】 フォイル【出版社】